北海道知事選挙総括

2019 年 4 月 7 日投開票の北海道知事選挙の結果は石川氏 963, 942 票、鈴木氏 1,621,171 票。大差での敗北でした。誠に残念で悔しい結果でしたが、今後安倍改憲を阻止し、戦争への道を断ち切るために、私たちは参院選で、あるいは衆参同日選挙で、最低でも 3 分の 1 議席以上を得なければなりません。そのために今回の知事選を振り返り、そこから学び未来に生かす必要があります。私たちに何が足りなかったのか、またこの間得たものは何だったのか。以下に簡単にまとめ、5 月 25 日に行われた知事選総括集会の記録を添付して総括とします。

１．私たちに不足していたもの

１）候補者選びからが選挙戦という意識

若き夕張市長として知名度の高かった鈴木氏は、候補者になるまでの闘争をドラマとして見せることにより、さらに知名度を上げムード作りを行った。

一方わが方は候補者選びのプロセスにおいて迷走し「市民と野党の連携」というドラマを見せることができず、市民の側からも独自候補者の提案ができなかった。

1 月末になって初めて石川さんの名前が候補者としてあがったため、知名度の点で大きく差をつけられてのスタートだった。また、知名度を上げる戦略的取組も不足していた。

また石川さんが一貫して無実を訴えた政治資金規正法違反の件は相手陣営に利用され、SNS などによって拡散され、時間がなかったこともあって十分に払拭するには至らなかった。

２）戦略は十分だったか

鈴木氏は「若さ」と「やり手」「苦労人」そして「ピンチをチャンスに」という（よくわからない）イメージだけをアピールし続けるという「戦略」をとった。一方、はっきりとした主張や政策を押し出すことはせず、徹底して争点隠しを行った。

石川さんは「市民と野党の統一候補者」というイメージと、「北海道独立宣言」「ＩＲ・ＪＲ・原発」というはっきりとした主張と政策を前面に押し出し、政策論争のステージに相手を引き込んで闘うという「戦略」を立てた。

政策を前面に押し出すこと自体が間違っていたわけではない。しかしイメージ戦略の不足は否めなかった。そして、政策面においても、鈴木氏との違いを北海道民に十分伝えることができなかった。なぜ伝えられなかったかを考える必要がある。また「ＩＲ・ＪＲ・原発」に加えて、何が必要だったかを考える必要がある。私たちは、北海道民が自治体の首長に対していま何を切実に期待しているかについて耳をすまし考えただろうか。

３）統一自治体選挙の中の知事選をたたかう難しさを予想していなかった

石川さんが候補に浮上したときに 7 者（立民、国民、連合、農民+共産、社民、市民の風）が石川さんを推薦するという形がとれた。しかし統一自治体選挙の中の知事選であるために「合同選対」というかたちではなく、連合中心の「選対本部」と共産中心の「選対」そして市民の動きという、大きく三つの「選対」が連絡・連携を取りながら闘うというかたちをとることになった。実際に動き出してみると、7 者の力の分散は否めず、私たち市民のパワーも分散した。

選挙期間中は、市民と野党間では「連携調整会議」を開き、また個別に各選対の責任者どうしで連絡を取り合ったが、これまでの選挙（特に衆議院選挙）の時のように、地域ごとに市民と選対との連携をはかるという方針

をたてられなかった。

４）市民と野党の自力の限界ー無党派層、無投票層への働きかけが十分にできなかった

選挙結果を見ると、共闘を組んだ野党の支持層がすべて石川さんに投票しても当選することはできないことが明確である。「市民と野党の共闘」は必須だが、「市民と野党の共闘」だけでは勝てないことがはっきりした。無党派層、無投票層をどのように巻き込んでいくかが今後の課題である。ただ無党派層、無投票層への働きかけとしてリーフレット「『支持政党なし』というあなた」を作成し、同様のポスターを掲げるなどの試みはあった。

５）SNS の活用が不十分だった

市民による石川さん等身大パネル作成やＬの人文字づくりの SNS 発信などの試みがあったが、総体として SNS の活用が不調だった。候補者のツイッターフォロワー数も、立候補後にツイッターをスタートさせた石川さんの約 3,300 に対し、夕張市長時代から続く鈴木氏は 24,000 と一桁ちかく違っていた。また鈴木氏は集会で参加者と写メを撮るなど SNS を強く意識した戦術をとっていた。

２．私たちが得たもの

１）市民と野党の共闘による統一候補者の実現

全国 11 の知事選挙で唯一、与野党一騎打ちの構図をつくりだした。石川さんを四者（立憲・国民・連合・農民連）と三者（共産・社民・市民）の共闘によって擁立し、連携して選挙戦を闘った。候補者の政策決定過程で、市民と野党が共に協議し、これまでにない共闘の姿を見せる事ができた。

２）市民と野党の共闘のかたちの進化と、力が分散された中での市民のがんばり

・市民は 2018 年 10 月 11 月に知事選シールアンケートを行い街頭で知事選リーフを配布するなど知事選への関心を高める努力をした。またアンケートの結果を野党に提示し、政策決定に結びつけた。
・告示前 3 週間の間に全道各地 11 の地域で市民主催の集会が開かれ、「市民の風」の上田代表、川原代表が全道を回り、石川選対もできうる限り市民集会に対応した。
・選対別室に市民スペースが確保され、延べ 120 人ほどが石川さん応援の作業に参加した。
・統一地方選の中、力が分散されたにもかかわらず、全道で分かっているだけでも延べ 130 回以上の市民街宣が行われ、それ以外に個人スタンディングをおこなった市民の風会員が何人もいた。
・２台の市民街宣車が札幌を中心に走った。
・市民の風ライブ隊が各所で活躍した。
・事務局からの発信としては、従来からの「予定一覧」のメール送信に加え、HP「石川ともひろ市民応援団」が開設され、毎日更新された。
・電話がけをし、法定ハガキを書き、応援グッズを身に着けるなど、市民の多様な努力があった。

３）石川知裕候補が見せてくれた「自治のある北海道」という理想

統一自治体選挙という条件の中で、それぞれの取り組みへの参加人数は多いとは言えなかったが、参加者は力をふり絞った。また短い時間の訴えにもかかわらず 96 万人の道民が石川さんに投票してくれた。それは石川候補が見せてくれた「自治のある北海道」という理想の力だったのではないか。